

マイクロ・アグレッションと私たち

～ 最終章 ～ 13

朴 希沙 (Kisa Paku)

お久しぶりです。出産と育児にともない2回に渡って『対人援助学マガジン』への執筆をお休みしていましたが、今号から無事復帰できることとなりました。そして執筆をお休みしている間（2020年12月）に、ここ数年間翻訳に取り組んでいた書籍『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション—人種、ジェンダー、性的指向：マイノリティに向けられる無意識の差別』（デラルド・ウィン・スー著、マイクロアグレッション研究会訳）を無事明石書店から出版することが出来ました。

この連載を始めた目的は、連載開始当時はあまり知られていなかったマイクロアグレッションについて、今回翻訳をした『Microaggressions in

Everyday Life : Race, Gender, and Sexual Orientation』をもとに紹介していくことでした。これまで12回に渡り、マイクロアグレッションの概要やエピソードの紹介、乗り越え方・取り扱い方についての考察、Q&A等を、間に緊急コロナ企画もはさみながら書いてきました。誰が読んでくれるのか分からぬまま、とにかく書き進めてきた連載でしたが、次第に「連載を読んでいます」「連載をもとにマイクロアグレッションの勉強会をしています」「マイクロアグレッションについて知りたくていくつか連載を読みました」というお声をいただくようになりました。私自身、書きながら改めてマイクロアグレッションについて整理したり、考えたりする大切な機

会をもらってきました。そういった中で無事翻訳書を出版でき、ほっと一安心、これからはむしろ始まりですが、ひとつの区切りがついたことを感じています。

そこで、当初の目的であったマイクロアグレッションの紹介は、今後は翻訳書に譲ることとし、今回は翻訳書を出版するまでの経緯や今後のマイクロアグレッション概念活用の可能性について述べ、連載を閉じたいと思います。新たに別のテーマで連載を始める予定ですので（詳しくは執筆者短信を御覧ください）、そちらもまた注目していただけたら嬉しいです。

● 翻訳を始めるまで

私が初めてマイクロアグレッションという概念を知ったのは、修士論文を執筆している最中でした。もともと、在日コリアンを始めとするマイノリティに対する心理支援に関心があり、人種・民族的マイノリティに対するメンタルサポートについて論文を調べていたのですが、日本語の論文が少なく、米国の論文を読んでいる際に「Microaggressions」という言葉に出会いました。

当時、私は在日コリアンメンバーと日本人メンバーとで行っていたサポートグループ（「それが一人のためだとしても（以下、してもの会）」）において、在日コリアンメンバーが抱える不安やストレス、怒りの背景に「差別」

とまでは言い難いものの、日常にあふれるプレッシャーがあることを感じていました。それは、朝鮮半島に対して敵対的な報道や話題であったり、自分の出自や名前について説明することの困難さであったり、「日本人しかない」という前提で進む会話等、まさに日常の親しい人間関係や職場、学校といったリアルな「現場」で日々直面しなければいけないある種の緊張感や疎外感のようなものでした。そのような感覚は、ひとつひとつは大きな問題にはなりません、積み重なることでその場にいる人々や環境への不信感につながったり、時には怒りのような形で他者や自分に向いたりするようなものでした。

上記のような、まさに日常の些細なやりとりの中で起こる、だからこそより言語化しづらい疎外感やストレスについて、心理社会的側面から捉え研究につなげている概念が「マイクロアグレッション」だったのです。私はもともと臨床心理士を志し、あくまで個人の支援と個人の心理に深い興味を抱いてきました。しかし同時に、個々の心理が社会や歴史とどうリンクしているのか、丁寧に考える作業や研究を行いたいと思ってきました。そのような私の関心に、マイクロアグレッションはまさに“ヒット”したのだと思います。

当時、日本にはマイクロアグレッションに関する詳しい文献はありませんでした。私はもともと言語が好きだったので、ぜひこの本を翻訳し、日本

に紹介したいと思うようになりました。この気持は修士論文を書き終えた頃にはほぼかたまり、「してもの会（後に、在日コリアンカウンセリング&コミュニティセンターにつながっていきます）」のメンバーや当時大学院で指導してくださっていた先生に相談をしながら、翻訳書の出版という初めての試みに挑戦することになりました。

● マイクロアグレッション研究会の 紆余曲折

このように始まったマイクロアグレッションの翻訳会（マイクロアグレッション研究会）には、次第に関心のある方が集まってくるようになりました。そして、それぞれが関心のある章を訳しながら訳語について討論を重ねていきました。特に「マイクロアグレッション」をなんと訳すかについてはぴったりの言葉が見つからず、何度も何度も議論しました。例えばマイクロを「小さな」とか「微小な」と訳してしまうと、決して小さくはないその影響を伝えることが出来ません。かといって「曖昧な」とか「無意識の」と言うとりこぼしてしまう内容があります…何度も話し合いを重ねた結果、マイクロには日常の、とかマクロでは捉えきれない、等様々な意味が複合的に込められていることから、（そしてぴったりの訳語を見つけることが出来なかったということからも…）

そのまま「マイクロアグレッション」と訳すことになりました。

マイクロアグレッションについて興味があり集まった人々からなる研究会ですが、マイクロアグレッションは全ての場所で起こりえますし、誰もが無意識のうちにやってしまうことがその特徴です。そのため時には研究会の中ですら生じてしまうマイクロアグレッションについて、緊張をはらんだ話し合いがオンタイムで行われたり、対立的な状況になったりすることもありました。そんな紆余曲折を経ながら、最終的には監訳者を置かず、あくまでもグループで訳したことが伝わるように「マイクロアグレッション研究会」を翻訳者に置くことが決まりました。こういった意思決定や訳語の調整といったひとつひとつの紆余曲折にも根気強く付き合ってくくださったメンバーの皆様、そして出版社の方には、心から感謝しています。

● 今後に向けて

このようにして日本で初めてマイクロアグレッションについて体系的に紹介する書物『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション』をなんとか無事翻訳、出版することができました。もちろん本の出版はゴールではなくスタートです。これから、マイクロアグレッションがどのように日本社会に浸透し、活用されていくかが大切です。

詳しくは書籍の「あとがき」にまとめられています。マイクロアグレッションはマジョリティ、マイノリティ双方にとって活用できる概念だと思います。もちろんほとんどの人はマジョリティ性とマイノリティ性の両方を併せ持っていますが、社会的属性やそのことで被る構造的な差別、不平等は存在し、そのため個々人は社会で異なる立場にあるという視点は忘れてはならないと思います。

翻訳書では、マイクロアグレッションを受けることによってマイノリティに生じる様々な影響が述べられている一方で、マイクロアグレッションに気づかず、マイクロアグレッションをし続けてしまうことによってマジョリティが失う豊かな可能性があることについても言及されています(第6章「マイクロアグレッションの加害者と抑圧—野獣の本性」)。マイクロアグレッションという概念がそれぞれ

のコミュニティに浸透し、議論が深まることによって、自分とは異なる立場の他者が日常生活においてすぐ隣に存在し、普段の何気ないやりとりの中でストレスやプレッシャーにさらされていることに改めて気づいたり、皆にとってより生きやすいコミュニティを作っていくための指針を考えたりすることにつながればと願っています。

約3年半に渡って、翻訳と同時に続けてきた連載ですが、マイクロアグレッションに関する内容は今号までとします(次号より新たな連載を始める予定です)。ここまで読んでくださった皆様、そしてこの機会をくださった対人援助学マガジン編集部の皆様、感謝しています。またどこかでお会いした時には、声をかけていただけたら嬉しいです。「対人援助学マガジン、よんでいますよ〜!」と^^ありがとうございました。